

平成七年度

大谷学会研究発表会

発表要旨

顕真実教の明証

一 楽 真

そもそも、教が真実であるか否かは、何を以て証明され得るであらうか。往々にして論理の高邁さや信者の多さ、さらには教祖の偉人性が教の真実を表すかのように思われているのではなからうか。ところが親鸞は、「顕真実教の明証」として『大経』発起序の釈尊と阿難の出会いの事実を挙げるのみである。これは何を意味しているのだろうか。これまで、親鸞の真実教決定の理由を考える際には、必ずと言ってよいほど、『大無量寿経』には釈尊の出世本懐が語られているからということが取り上げられて来ている。その場合、出世本懐を語る他の経との関係が問題になってきた。特に『法華経』との対比の中で、『大無量寿経』の真实性を弁証することに明け暮れてきたと言ってもよいほどである。しかし、親鸞が『教行信証』において掲げていくのは、証道いま盛なる仏道としての浄土真宗である。それは「在世正法像末法滅、濁悪の群萌、齊しく悲引したもうをや」と述べられるように、時機を問わずにはたらく仏道であり、それを明らかにすることに親鸞の課題はあった。では、阿難が釈尊に出遇ったという事実のみを「顕真実教の明証」としていく親鸞には、どのような意図があったのだろうか。

仏の聖旨を承けた阿難が座を起ち上がるところから『大経』の

発起序は始まる。阿難は二十五年の間、釈尊に常につき随い、多聞第一と称される仏弟子であった。しかしまた阿難は、釈尊の在世中には阿難漢果に達することができなかった「未離欲」の者とも伝えられている。特に釈尊の入滅に関わって、病にかかった釈尊のことを憂い、悲泣する阿難の様子が伝えられている。「自灯明、法灯明。自帰依、法帰依。」と語る釈尊の教えをすでに聞いていたにもかかわらず、なおも釈尊に頼らうとして、釈尊が入滅することを憂える阿難、その阿難が仰いでいる釈尊は自分を見守り、育て続けてくれる存在である。このような阿難が釈尊の入滅という事実から目をそらさず、釈尊の入滅を超えてはたらく法に出遇っていくところに、『大無量寿経』の中で特に阿難が対告衆とされる意味がある。すなわち、これまで釈尊のそばに侍しながら、釈尊の意に気づくことなく過ごしてきた阿難が初めて釈尊の希有なる姿に出遇い、問いを発す存在となるのである。

そこに阿難が初めて見たのは、諸仏を念じている釈尊であった。過去・未来・現在の三世の諸仏を生み出す法において如来たらしめられている釈尊であった。個人の才能や努力の故に如来が誕生するのではないことを、阿難は初めて了知したのである。「如来の徳を行じたもう」釈尊、そこには「仏の所住に住したまう」ことが背景としてあったのである。それに気づかずには釈尊を個人的能力に優れた人として見てきたところに根本的誤りがあったのである。この阿難の問いに対して、釈尊は問いが阿難自身の問いであるかどうかを吟味する。いつまでも釈尊を頼りとしてきた阿難に真に変革が起こったかどうかを確かめるのである。この確かめに立って釈尊は阿難の問いを絶賛する。それは、阿難の問いが単に阿難が釈尊から独立したということにはとどまらないからであ

った。阿難は自ら問うたことが「深き智慧、真妙の弁才を發して、衆生を愍念」するものであるとは思っていなかったに違いない。しかし、阿難の思いを超えて、三世十方の諸仏を貫く普通の法に阿難が出遇ったことの意義は大きい。何故なら、釈尊がこの世に出でたもう本意もそこにあるからである。釈尊は長い間この世を明らかにしようとして待ち続けていた。釈尊がいくら普通の法を説こうとしても、聞く側が釈尊を一天才と見る限り、普通の法に出遇うことはできない。阿難の問いを絶賛する釈尊の言葉には、ようやく法を開示できる時がやってきたという釈尊自身の喜びが込められている。

阿難の問いがなければ、釈尊の出世の正意は明らかにならないままであった。このことを端的に示しているのが続いて引用される『如来会』の文である。親鸞は独自の訓点を付すことによって、阿難の問いが如来出世の本意を明らかにしたものと位置づけている。つまり、釈尊がいくら普通の法を説こうとしても、阿難がその意に気づき問うことがなければ、普通の法は開示されない。そのことを明かす経文として『如来会』は置かれている。この確かめを承けて、更に阿難に起こった事実が阿難一人に止まるものではないことを語るのが次の『平等覚経』の引文である。この文もまた、親鸞の訓点に注意して読む必要があると思われる。特に注意をひくのは、「若」の字を親鸞は「若し」と読んでいることである。ここは「なんぢ」と読む方が意味は通りやすく、先学もこれに従っているものが多い。その場合、「なんぢ」とは阿難に対する呼びかけの言葉という意味に限定されることになる。これに対して親鸞の読みは、阿難に起こった変革の事実が、決して二千五百年前の限定された出来事にとどまらないことを示

そうとするものである。すなわち、「もし仏意を知るに縁つて妄れないならば、仏辺にあつて仏に侍えたまう」という意味に取れる読みである。これは「縁知仏意」という一点において、仏に値うことが、いつでも・誰でも・どこにおいても成り立つということを明らかにしていると思われる。

ここから振り返って『大無量寿経』の文をうかがうと、無盡の大悲を以て三界を矜哀したもう存在が「如来」という語で述べられていることが改めて注目される。文脈から言えば、この「如来」が釈尊を指していることはすぐに分かる。その意味で、「我」とあつても特に違和感を抱くことはないであろう。ところが、「群萌を拯い、恵むに眞実の利を以てせんと欲す」のは釈尊一人の願いではなく、三世十方の諸仏に通ずる願いである。それを明示するのが「如来」の語なのである。親鸞にとって如来とは世々に出でて普通の法である弥陀の本願を説く存在である。阿難の問いによって明らかになった如来出世の正意は、三世十方の如来出世の正意であり、それ故にこそ時代を超えて群萌を平等に拯う、普通の法であることが確かめられているのである。

眞実教とは、教理の優劣によつて決定されるものではない。どこまでも生きてはたらく事実においてのみ眞に於て実なることが証しされるのである。論理の整合性や精緻さに振り回されてはならない。眞実教とは流転の迷いを超えしめるはたらきとしてのみ現前するのである。『大無量寿経』は釈尊の入滅ということを踏まえて、平等・普通の法を説く經典である。出遇いにおいて誰の上にも流転を超える仏道が釈尊と阿難の出遇いにおいて開かれたのである。そのことを示す何よりの明証が、阿難という一人の人間の上にと起こった変革の事実なのである。